

私を支えてくれた税金

信州大学教育学部附属長野中学校 1年 森岡 真由

二分の一成人式——。小学四年の一月、両親への感謝の気持ちを伝える行事が学校でありました。その時私は原稿を書くために、自分が幼かった時のころについて母にインタビューをしました。

私は、生まれつき心臓の病気を患っていたそうです。生まれて間もなく、母はその事実を医者に告げられたとき、大変なショックを受け、奈落の底に落ちたような気持ちになったそうです。「心室中隔欠損症」という心臓の心室の真ん中を隔てる壁に穴が開いている病気です。私は0歳の時から経過観察のため、月に一回大きな病院に通っていました。また、「シナジス注射」という、基礎疾患があり感染に対する抵抗力の弱い一歳未満の子供が受ける注射も受けていました。普通の人なら、何かのウイルスに感染しても自分の力で治すことができるのですが、私のような免えき力の弱い人は、ちょっとした感染でも重症化し、命を落とす危険があったからです。

そしてさらに私の父は、仕事の関係で引っ越しをくり返していました。そのため、引っ越すたびに病院を転院することは不可能だったため、祖父母が住んでいた長野県の病院に通っていました。当時は大阪府に住んでいたので、大阪府から月に一回長野県まで通っていたそうです。長野県に行くたびに祖母は、夜行バスで迎えに来て、翌朝、私たちと一緒に病院へ行っていました。いつも寄りそってくれていました。そして、祖母だけでなく、祖父も必ず最寄りの駅まで車で迎えに来てくれていました。当時の私は、家族みんなに支えられていたと思います。

月一回の通院は、かなりの費用がかかっていたのですが、乳幼児医療費助成制度というものがあり、ずいぶん助かっていたことを母は教えてくれました。それは、乳幼児が医療機関で受診した医療費のうち、三割を税金から助成する制度です。そのため、精神的、身体的には大きな負担をかけていましたが、金銭的には、そこまで大きな負担をかけることなく、病気と向き合うことができました。税金は私の知らなかったところで家族と私を支えてくれていたのです。

幸いなことに、私は小学校へ入学する六歳のときに、開いていた穴が自然閉鎖し、完治することができました。今、中学生となった私もいずれは大人になり、社会貢献する日がやってきます。そして、それと同時に、様々な税金を払わなければならないようになります。ですが、その税金が幼かったころの私のような子供を助け、家族を笑顔にさせるのであれば、税金を払うことで誰かを支えているのだという気持ちになれると思います。税金によって助けられている人が、またその次の世代へと輪のようにつながっていけば、よりよい社会が実現できるのだと私は確信しています。